政治的世界の形成原理としての自愛について（一〇）

今井仙一

三二　法と国家との底にひそむ階級的エゴイスムス

マルクシズムにおける自愛の契機について（五）

一八四二年秋、「ライン新聞」に載せられた一つの論説――それは「出版の自由」を問題としている――のなかでマルクスは語っている。「法律は決して自由に対する抑圧手段ではない。それはちょうど重力の法則が運動に対する一つの抑圧手段でないと同じである……法律はむしろ、そこにおいて自由が一つの非個人的な、理論的な、個人の恣意から独立した存在を獲得したところの、実定的な、明るい、一般的な規範である。一つの法典は一国民の自由の聖書 die Freiheitsbibel eines Volkes である」。* ところで、同じ新聞に載せられたいま一つの論説――これは「材木窃盗法」を主題としている――のなかでは、マルクスはつぎのように語っているのである。「真の立法者は不正以外の何ものをも恐るべきではない。しかるに、立法者となったところの利益 das gesetzgebende Interesse は、ただ、法のもたらす諸帰結に対する恐れ、そもそも立法の対象たるところの悪人どもに対する恐れ、を知るのみである。残酷 Grausamkeit は、臆病 Feigheit の口授する法律の性格である。なぜなら臆病は、ただ残酷であることによって

のみエネルギッシュであることができるからである。ところで、私的利益 Privatinteresse はつねに臆病である。というのは、それの心、それの魂は、いつでも奪い取られ、毀損されることのできる一つの外的対象だからである。そして誰か、心と魂とを喪失するという危険の前に戦慄しないでいられよう？　どうして私益的な立法者 der eigennützige Gesetzgeber が人間的 menschlich でありえよう？　というのは、非人間的なもの、一つの他者的・物質的な本質が、彼の最高の本質だからである。『彼が恐怖をもつとき、彼は兇暴だ』Quand il a peur, il est terrible. 『ナショナル』はギゾーについてかく語っている。この標語は、私益の、かくてまた臆病の、すべての立法の標題とされることができる」**。

* Marx, Debatten über die Pressfreiheit usw. —— Marx/Engels, Werke, Band I, Dietz Verlag Berlin 1956, S. 58.

** Marx, Debatten über das Holzdiebstahlsgesetz. ——ib., S. 121—2.——右に「ナショナル」と言われたのは、一八三〇年から一八五一年までパリで刊行された日刊新聞 „Le National" のことである。

一つの法典は一国民の自由の聖書であるという。この一句によってマルクスは、おそらくヘーゲルの影響のもとに、理想主義的な法の理念を要約したのである。あらゆる立法がそれを目ざすべき法の理想を語ったのである。しかし現実の立法はつねに必ずしもこうした法理念の正しい表現ではありえない。いな、現実の国家が所有する階級と所有せざる階級との峻しい対立を内蔵するかぎり、そして立法は、同時に政治的権力の掌握者でもある所有階級によってなされるのが常であるかぎり、現実の法律は必然的にこの立法階級の特殊利益を反映するもの、自己の私益を擁護することに汲々たる支配階級の求心的自愛を表現するものとして出現せざることをえない。* そのことを明らかにしようとしたのが右に引用された第二の文章であったのである。

*この点については**二七**が参照されてよい。わたしはそこで、あらゆる実定法の底に、少なくとも一つの契機として支配者即立法

者の求心的自愛をみとめ、それとの関連において、イェーリングの法思想を瞥見しておいた。

所有階級にぞくする個々の個人が、たんなる私人として彼の私益の追求に狂奔するかぎり、われわれはそこに一つの嫌悪すべき人間的現象はみとめえても、いかなる政治哲学的問題をもみとめることをえない。しかし、所有階級が同時に支配階級として、直接にまれ間接にまれ、国家の立法あるいは行政に参画し、かくて国家権力を自己の私益の擁護機関として利用しようとするとき、われわれはそこに一つの重要な政治哲学的問題を見いださざるをえない。若きマルクスがライン州会での「材木窃盗法」に関する討論のなかに看取したのは、まさにそうした問題であつたのである。法と国家とがつねに利己的な所有階級の走狗となるというほとんど不可避の現象であったのである。たとえば彼は語っている。「森林所有者の雇い人を一つの国家権威にまで変化させるこの論理は、国家権威を森林所有者の雇い人にまで変化させるものである。国家組織、個々の行政官庁の規定、その一切は常規を逸脱しなければならない。というのは、その一切が森林所有者の手段にまで低下し、そして彼の利益が全機構の限定的な魂として出現せんがためにである。国家の一切の機関は、森林所有者の利益がそれをもって聞き、監視し、評価し、保護し、つかみ、そして走るところのもろもろの耳、目、腕、脚となるのである*」。

* ib., S. 130.

マルクスがここで取りあげて論評の対象としているのは、「ライン州会」といった、比較的小さい立法機関での討論である。しかし、この特殊な一機関の討論を通じて、マルクスはそこに、現存するすべての国家の本質的性格を看取したのである。かの州会をさして彼は語っている。「州会はかくてその使命を完全に果たした。それは、その召集の目的通り、一定の特殊利益 Sonderinteresse を代表し、そしてそれを最終の究極目的として取り扱ったのである。そのさい州会が法を踏みにじったということは、それの課題の一つの単純な帰結であるにすぎない。というのは、利

益は、それの本性上、盲目的な、無節制的な、一面的な、要言すれば没法律的な自然本能だからであり、そして一体、没法律的なものがどうして法律を与えることができよう？　私的利益は、立法者の王座に据えられたからといって、決して立法の能力を与えられるわけではない。それはちょうど一人の唖者が、法外に長いメガホンを手にしたからといって、決して語る能力を与えられないのと同じである*」。この言葉はしかし、たんに特殊な一州会の性格を示すだけのものではない。かえってマルクスによれば、階級対立の上に成立する地上の一切の国家、またそれらの国家における一切の立法は、すべて究極においてそれと同一の性格を、すなわち、ある一定の特殊利益を代表し、かつそれを究極の目的として取り扱うという性格を有するものであったのである。

* ib., S. 146.

マルクスの『ヘーゲル国家哲学批判』は、ヘーゲルの『法哲学綱要』„Grundlinien der Philosophie des Rechts“の二六一節の考察から始められている。ヘーゲルによれば、家族と市民社会とは国家の概念領域であり、国家の有限性の領域であり、かかるものとしてそれらは国家に「下属し」、国家に「依存する」。すなわち、国家は家族と市民社会との根柢をなし、それらを支持しそれらを存在せしめる実体として捉えられたのである。それに反してマルクスは、逆に、家族と市民社会とを国家の基底あるいは前提たるものとして捉えようとした。かくて彼は語っている。「家族と市民社会とは、国家の光がそこから燃えたつところの暗い自然基底 der dunkle Naturgrund, woraus das Staatslicht sich entzündet として現われる*」。また、ヘーゲルにおいては「理念が主体化され、そして家族と市民社会との国家に対する現実的関係は、理念の内的・想像的な活動として捉えられる」。だが、実際には、「家族と市民社会とは国家の前提 die Voraussetzungen des Staats である。それらこそ本来的に活動的なもの die eigentlich Tätigen である。しかるに、思弁においては関係は逆転される。だが、理念が主体化されるとすれば、そこでは、現実的

な主体、市民社会、家族、『もろもろの状態、恣意、等々』は、理念の諸契機、――非現実的な、他のものを意味する、客体的な諸契機となるのである[**]」。また、「家族と市民社会とは現実的な国家部分、意志の現実的・精神的な実存である。それらは国家の存在諸様式である。家族と市民社会とが自己自身を国家とするのである」。かくて、「政治的国家は家族の自然的基底および市民社会の人為的基底なしには存在することをえない。それらは国家にとって一つのコンディティオ・シネ・カ・ノンである」。しかるにヘーゲルでは一切のものが逆立ちさせられる。「条件が条件づけられたものとして、限定するものが限定されたものとして、生産するものがそれの生産物の生産物として措定されるのである[***]」。

* Marx, Aus der Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Kritik des Hegelschen Staatsrecht. ―― Werke, Bd. I. op. cit., S. 205.

** ib., S. 206.

*** ib., S. 207.

わたしはさきに（二九のbにおいて）市民社会の国家からの分離に関するマルクスの所説を瞥見し、そしてつぎのように語っておいた。「近代的な政治的国家、あるいは民主的国家は、マルクスによれば、血統、所有、等々の差別をたんに形式的に、あるいはたんに詭弁的に、廃止したにすぎない。事実において、国家は、こうしたもろもろの差別をなお依然として存立させ、活動させ、のみならずそれを前提し、それに支持されて初めて国家としての自己の存在を保存しうるのである。では、たとえ形式的にもせよ、ともかく国家から切り離されたこれらの差別が充実した力をもってその特性を発揮する場所はどこか。それはすなわち市民社会にほかならない」。しかるに、マルクスによれば、市民社会は私的利益の領域であり、エゴイスムスの領域であり、また bellum omnium contra omnes の領域であ

った。この領域が近代にいたって国家から完全に自己を分離すると共に、かえって逆に国家の前提として、基底として、国家の性格そのものを限定するものとなったのである。かくて、「市民的生が実在的な紐帯なのであって、政治的生がそれであるのではない……ただ政治的迷信のみが、今日でもなお、市民社会は国家によって結合されねばならない、などと空想する。しかし現実においては逆に国家が市民社会によって結合されるのである」。エンゲルスがマルクスの思想を要約した言葉によれば、「一般に国家が市民社会をでなく、かえって市民社会が国家を制約し規整する。かくて、政治とそれの歴史とは、経済的関係とそれの発展とからして説明さるべきであって、その逆なのではない」*のである（二九のdを参照）。

＊ 周知のように、『経済学批判に寄せて』の序文においては、より明確に、「生産関係の総体が社会の経済的構造を形成する。これが実在的な基底であって、その上に法制的・政治的上部構造がそびえ立つ……」といった風に語られている。Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, op. cit., S. 338.

マルクスによれば、政治的国家は一般的利益の領域を、それに反して市民社会は私的利益の領域を代表する。そこからしてこの両者の分裂は、同時に一般的利益と私的利益とのあいだの相剋を示すものと考えられる（二九のb）。しかし、政治的国家が一般的利益の領域を代表するのは、たんに形式的、名目的、あるいは詭弁的にであるにすぎない。事実において政治的国家は、それの前提あるいは基底たる市民社会の性格を反映し、この社会における階級的構造によってふかく制約されているのである。そのことはさきに（三〇のdにおいて）援用されたマルクス、エンゲルスのつぎの言葉からしても明らかであるであろう。いわく、「まさに特殊利益と共同的利益とのこの矛盾からして、共同的利益は、国家として、現実的な個別的利益および総体的利益から分離された一つの独立的形態をとって現われるのである。この国家は、同時に幻想的な共同性 illusorische Gemeinschaftlichkeit として現われるのであるが、し

かしつねに実在的な基底……わけても、労働の分割によってすでに制約された諸階級――そのうちの一つが他のすべてを支配する――の利益、といった実在的な基底に即しているのである」。

国家は形式的・名目的には一般的・共同的利益を代表するものとして出現する。しかし現実においては、国家は市民社会における優越的階級、すなわち所有階級の特殊利益を擁護するための一つの機関にほかならない。『共産党宣言』の周知の表現によれば、「近代的国家権力は、たんに、全ブルジョア階級の共通の事務をつかさどる一つの委員会であるにすぎない」*。ところで、全ブルジョア階級の共通の事務のうち最も主要なもの、それは、マルクスによれば、プロレタリアートの犠牲においてブルジョア階級の特殊利益を無限に増大せしめ、かつそれを安全に確保することにほかならない。いわゆる階級的・求心的自愛のあくことなき発揮である。そこからして、この階級の委員会としての国家権力は、当然、この階級によるプロレタリアートの抑圧の機関たらざるをえないわけである。けだし、同じく『宣言』の言葉によれば、「本来的な意味での政治的権力は、他の階級の抑圧のための一階級の組織された権力」**にほかならないからである。

* Manifest. I, op. cit., S. 26.

** ib., II, S. 43. ――同じ思想は次のようにも表現されている。いわく、「近代的産業の進歩が資本と労働とのあいだの階級対立を発展させ、拡大させ、深化させた程度に比例して、国家権力は次第次第に、労働階級の抑圧のための一つの公的権力、階級支配の一つの機械、たるの性格を獲得したのであった」。Marx, Der Bürgerkrieg in Frankreich, III.――M/E, Ausgewählte Schriften, op. cit., Bd. I, S. 488―9.

階級対立の上に成立する現実の国家にあっては、支配的地位に立つ所有階級は、よし外観だけにもせよ、ともかく「人間的」な実存を享受することができる。さきに（二九のeにおいて）言われたように、「所有する階級とプロレタリアートの階級とは同一の人間的自己疎外を現わしている。しかも第一の階級は、この自己疎外において自己を幸福か

つ保証されたものと感じ、疎外をそれ自身の権力として知り、そしてこの疎外のなかに一つの人間的実存の外観を所有する」のである。それに反して被支配的な地位に立たされた非所有階級――それはひと握りの所有階級に比すればつねに国民の大部分を形成する――は、「疎外において自己を絶滅されたものと感じ、それのうちに自己の無力と一つの非人間的実存の現実とをみとめる」のである。すなわち、階級対立の上に立つ国家においては、人間――すくなくとも国民を形成する大部分の人間――は否定され、捨象される。もと人間を生かすために在るべき法組織と政治組織とが、人間を窒息させ、人間を非人間的な物へと疎外させる暴力として作用するのである。たとえばマルクスは語っている。「ただドイツにおいてのみ思弁的法哲学が、すなわち近代国家のこの抽象的な、誇大な思惟が、可能であったとすれば……逆にまた、近代国家そのものが現実的な人間を捨象し、あるいは全人間 den *ganzen* Menschen をたんに空想的な仕方でのみ満足させるがゆえに、またその限りにおいてのみ、近代国家のドイツ的な、すなわち現実的人間を捨象するところの思想像は可能であったのである」*。

* Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung. ―― Marx/Engels, Werke, Bd. I, op. cit., S. 384—5.

右にマルクスは「現実的人間」について、また「全人間」について語った。現実的人間あるいは全人間というのは、政治的体制といった一つの特殊な枠のなかに局限されることのできないもの、無限に多面的な、無限に豊富な仕方で自己を限定することのできる「自由な」人間を意味するであろう。ドイツ的な君主制的官僚国家、それの思想的反映たるヘーゲル的法哲学は、そうした全人間を十分に生かしえないもの、いな、むしろそれを捨象し、それをたんに空想的な仕方でしか満足させることをえないものと考えられたのである。それを明らかにするのは、ヘーゲル、『法哲学綱要』の二七九節に関連して、マルクスが、君主制 Monarchie と民主制 Demokratie とを対比的に考察し

ているつぎの個所である。いわく、「君主制においては、全体、すなわち国民は、それの存在諸様式の一つ、すなわち政治的体制 die politische Verfassung のもとに包摂される。民主制においては、この体制そのものがたんに国民の一つの限定、しかもまことに国民の自己限定として現われる。君主制においては、われわれは、体制の国民 das Volk der Verfassung を有し、民主制においては、国民の体制 die Verfassung des Volks を有する。民主制はすべての体制の解決された謎である。そこにあっては、体制は、たんに即自的に、その本質から見て、のみでなく、さらに実存から、現実性から見て、それの現実的根拠、すなわち現実的な人間、現実的な国民へとつねに導き返され、そして国民自身の手になる作品として措定される。体制はそれが真にそれであるところのもの、すなわち人間の自由な生産物として現われる。もっとも、そのことは、ある関係からみて、立憲君主制についても妥当する、と言えるかも知れない。だが、民主制の特殊な差異は、つぎの点に、すなわち、ここでは体制は一般に国民のたんに一つの存在様式にすぎないということ、政治的体制がそれだけで国家を形成するのではないということに、存するのである*」。

* Kr. d. Heg. Rechtsphilos., op. cit., S. 231. ――ここに言われた「民主制」がブルジョア的民主主義をさすものでないことは明らかである。いわばそれは「在るべき」民主制をさすものと言われてよい。

マルクスによれば、ヘーゲルは国家から出発し、そして人間を主体化された国家とする。それに反して、民主制は人間から出発し、そして国家を客体化された人間とするのである。ちょうど宗教が人間を作るのでなく、かえって人間が宗教を作るのと同様に、体制が国民を作るのでなく、かえって国民が体制を作るのである。民主制にあっては、人間は法律のために存在するのではない。かえって逆に法律こそ人間のために存在するのである。すなわち、法律は人間的存在 menschliches Dasein である。それに反して他の体制にあっては、逆に人間が法律的存在 das gesetzliche Dasein なのである。民主制の根本差異はまさにその点にあると考えられる*。

* ebd.

右の言葉からしても明らかなように、いわゆる政治的体制は、もと、国民の自己限定たるべきもの、しかももろもろの可能な自己限定のうちの単に一つにすぎざるべきものであった。かかるものとしてそれは人間の自由な生産物たるべきであった。しかるに従来のあらゆる国家にあっては、その体制は人間に対して外から与えられたもの、いな、強制されたもの、いわゆる「他者的」として国民に対立するものとして現われてきたのである。エンゲルスの言葉をかりて言えば、「社会から出たところの、しかし社会の上に立ち、次第次第に社会に対して自己を疎外するところのこの権力、これが国家である」*のである。かかるものとして国家は人間の自己疎外の一つの形式であった。そこでは体制は国民のためにあるのでなく、逆に国民が体制のためにあるのであった。法律は人間のためにあるのでなく、逆に人間が法律のためにあるのであった。ところでさきに（三一において）言われたように、マルクスによれば、人間の自己疎外の根源は労働の分割とその必然的結果としての私的所有とのうちにある。したがって人間疎外的な君主制——それは階級対立の上に成立する従来のあらゆる国家を代表するものと言われてよい——の基礎をなすものは、帰するところ私的所有であると言われなければならない。マルクスはそれを簡潔に「かくて政治的体制は、その最高の尖端において、私的所有の体制 Verfassung des Privateigentums である。最高の政治的心情は私的所有の心情 die Gesinnung des Privateigentums である」**と語ったのであった。そしてそれへの対比において、現実的な人間、現実的な国民に立脚し、そして「全人間」を十分に生かすような真の民主制を要望し、そしてたとえば、「労働者革命における第一歩は、プロレタリアートを支配階級にまで高めること、民主制を戦いとることである」***と語ったのであった。

* Engels, Der Ursprung der Familie usw. IX. —— Marx/Engels, Ausgewählte Schriften, op. cit., Bd. II, S.

296.

** Kr. d. Heg. Staatsrechts, op cit., S. 303.

*** Manifest, II, op. cit., S. 42.

国家、あるいは政治的世界の基底をなすもの、それは熾烈なエゴイスムスの渦巻く市民社会である。この社会は一めんにおいてエゴイスト的な個々の市民あるいはブルジョアたちの活動の舞台でもある。しかしより以上にそれは階級と階級との闘争の場面なのである。すなわちそれは、所有する階級が所有せざる階級の犠牲においてあくことなく自己の求心的・エゴイスト的自愛の満足を求めようとする世界、それに対して無所有的な階級は、そうした所有階級の求心的自愛からして自己の根源的自愛の可能性、まさに「生存の権利」をどこまでも守り抜こうとする世界なのである。市民社会におけるそうした階級闘争を集中的な形で政治的に反映するもの、したがって一面つねに所有階級の階級的エゴイスムスの道具として利用されると共に、他めん、非所有階級の政治的解放の手段としてつねにこの階級によって争奪の第一目標とされるもの、それがすなわち歴史におけるその都度の国家権力にほかならない。すなわち、政治的世界を動かす最深の動機たるものは、つねに階級的自愛――あるいは求心的に他の階級の搾取といった形をとり、あるいは根源的に一階級の生存権の死守といった形をとるところの階級的自愛――であると言われなければならない。

三三　階級的自愛と政治的世界

マルクシズムにおける自愛の契機について（六）

マルクスは彼の著作のどこにも「自愛」といった言葉を用いてはいない。たまたま彼がこの言葉を用いたとすれ

ば、それはたとえば、彼がエルヴェシウスの思想に言及しつつ、「彼〔エルヴェシウス〕によれば、感性的なもろもろの特質と自愛、享楽と十分に理解された自己の利益とが、あらゆる道徳の基礎であった」と語っている個所（二八を参照）くらいなものである。したがってマルクシズムを問題としつつ、そこに「自愛の契機」を求めようとしたり、また「階級的自愛と政治的世界」を問題としようとしたりすることは、全く見当はずれの企図だと言われなければならない。マルクスの政治思想は、「生産力と生産関係との矛盾」といった、ザッハリヒな、客観的な、したがって科学的に験証されうる問題領域に求めらるべきであって、決して主観的な、あいまいな、捉えどころのない「自愛」といったものと関係させて考察さるべきではない。――ひとはこのようにわたしを難ずるかも知れない。

たしかにマルクスは「自愛」という言葉はあまり用いてはいない。しかし、上来わたしの見てきたように、彼は「エゴイスムス」という言葉はじつに頻繁に用いている。また、「利益」、あるいは「特殊利益」という言葉もわれわれのしばしば出会ってきた言葉である。それらは特にブルジョアジーについて頻繁に用いられる。わけても印象的なのは『共産党宣言』のつぎの個所である。いわく、「ブルジョアジーは、人間をその自然的な長上者に結びつけていた多彩な封建的紐帯を容赦なく切断し、人間と人間とのあいだに、赤裸々な利益 das nackte Interesse、没感情的な『現金勘定』、以外の他のいかなる紐帯をも残さなかった。ブルジョアジーは、敬虔な心酔、騎士的な感激、町人的な悲哀といった聖なる感動を、エゴイスト的な打算の氷のように冷たい水 eiskalten Wasser egoistischer Berechnung のなかで溺死させた*」。ところで、さきに（二九の最後の註において）言われたように、マルクスが「エゴイスムス」のもとに理解するものは、わたしのいわゆる求心的・利己的自愛にほかならない。けだしわたしは、一般に自己の利益を、わけても自己の特殊利益を、他者の犠牲において求めようとする、人間にきわめて根ざしふかき衝動をさして、それを求心的自愛と名づけたのだからである。それに反して、さきに（一五において）言及された、マルクスの墓前に

おけるエンゲルスの言葉、またさきに（三〇のbにおいて）援用された『ドイッチェ・イデオロギー』の思想、すなわち人間にとって最初にしてかつ最小限の欲求は何よりもまず「生きること」であり、かくて物質的生の生産であるといった思想は、わたしが上来「根源的自愛」と呼んできたものの一つの主要内容を指すものにほかならない。したがって直接に「自愛」という言葉は用いていないとしても、しかもマルクス、エンゲルスの全思索は、じつに人間の自愛、個ならびに集団の自愛、しかしわけても階級の自愛という基本的思想を枢軸として展開され、かつ発展させられたものと言わなければならない。

* Manifest, I, op. cit., S. 26.

周知のように、『資本論』の第一版序文においてマルクスは語っている。「生じうべき誤解を避けるために一言。資本家および土地所有者の姿をわたしは決してバラ色の光で描いてはいない。しかし、ここでは個人は、彼らが経済的諸範疇の人格化であり、一定の階級関係および利益の担い手である限りにおいてのみ問題となっているのである。経済的な社会形成の発展を一つの自然史的な過程として捉えるわたしの立場は、あらゆる他の立場にも増して、個々人を諸関係に責任あるものとはしない。というのは、たとえ個々人がどれだけ主観的にそれら関係を超越していようとも、しかも彼は、社会的には、それら関係の被造物たることをやめないからである」。*

* Das Kapital, Vorwort zur ersten Auflage.——Bd. I, op. cit., S. 8.

すなわち、マルクスの関心はどこまでももろもろの階級関係と階級的利益とに集中されていた。彼は個人をかかるものとしては大して問題とせず、かえって個をつねに階級との相関においてのみ捉えようとした。このことは自愛の問題についても妥当する。マルクスの問題としたのは何よりも階級的自愛、しかも主としてそれの求心的発現たる階級的エゴイスムスであった。わけてもプロレタリアートの搾取者としてのブルジョアジーのエゴイスムスであった。

たとえば彼は、右に引用された言葉にすぐ続けてつぎのように書いている。「経済学の領域においては、自由な、科学的な研究は、たんに、他のすべての領域におけると同じ敵に出会うだけではない。それの取り扱う材料の独自の性質は、経済学に対して、人間の胸奥の最も激烈な、最も偏狭な、最も意地わるいもろもろの激情 die heftigsten, kleinlichsten und gehässigsten Leidenschaften der menschlichen Brust を、私益の復讐の女神たち die Furien des Privatinteresses を、戦場に呼び出すのである……」*。ここに言われた激情、経済学の自由な、科学的な研究に対して復讐の刃をさし向ける激情とは何であろうか。それはまさに搾取階級――わけても大資本家階級の求心的・利己的激情にほかならない。そのことは右に羅列された最上級の形容詞とほぼ同じ形容詞をふくむつぎの個所――資本主義的蓄積の歴史的傾向を叙述しつつあるつぎの個所からしても明らかであろう。いわく、「……個人的な、分散された生産手段の、社会的に集中されたそれへの転化、それゆえにまた、多数人の矮小な所有の、少数人の大量的所有への転化、それゆえにまた、民衆の大群からの土地および生活手段および労働用具の収奪、この恐るべくかつ困難な民衆収奪が資本の前史を形成する。それは一連の暴力的方法を包括するのであるが、われわれはただそのうちの劃期的なもののみを資本の本源的蓄積の方法として考察したのである。直接生産者の収奪は、もっとも苛酷な野蛮行為 schonungslosestem Vandalismus をもって、かつまた、最も恥ずべき、最も不潔な、最も偏狭かつ最も意地わるい諸激情の衝動 Trieb der infamsten, schmutzigsten, kleinlichst gehässigsten Leidenschaften のもとに遂行される。自己の労働によって得られた、いわば個々の独立した労働個人と彼の労働諸条件との接合にもとづく私的所有は、他者の、しかし形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私的所有によって駆逐される」**。

* ib., S. 8.

** ib., S. 802.

さきの引用文に言われたように、マルクスは経済的な社会形成の発展を「一つの自然史的な過程 einen naturgeschichtlichen Prozess」として捉えようとした。また『経済学批判に寄せて』の有名な序文によれば、「一人の個人がいかなるものであるかは、彼自身がみずから考えるところからは判断されないのと同様に、こうした変革の時期はその時期の意識から判断されることはできず、かえってむしろ、この意識が、物質的生のもろもろの矛盾、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだの現存する衝突からして説明されるのでなければならない」。けだし、マルクスによれば、そうした諸変革の考察においては、「物質的な、自然科学的に正確に確認さるべき変革」と、「人間がその形式においてこの衝突を意識し、かつそれを解決するところのもろもろのイデオローギッシュな形式」とがつねに区別されねばならないからである。*

* Kr. d. pol. Ökonomie (Vorwort), op. cit., S. 338.

こうした言葉に導かれて、ひとは、マルクスの学説をただもっぱら自然史的な、物質的な、客観的な、かくて自然科学的なヴォキャビュラリのみでもって再構成しようと試みる。それはそれとして十分に正当な試みだと言われてよい。だが、そのさい、ひとはしばしば、マルクスの「自然」が主体的な人間を内に含み、人間の意志と行動とによって媒介されつつ歴史的にそれ自身を形成してゆく自然、その意味で、さきに（三〇のaにおいて）言われたように、一つの「歴史的自然」であったということを看過するきらいがないではない。そうした人々は、マルクスの学説を「人間的」な言葉で語ることを嫌悪する。たとえばマルクスの政治思想を問題とする場合にも、彼らはいわゆる「生産力と生産関係との矛盾」が一切の政治現象の究極の基底だと考え、そしてその場合、生産力あるいは生産関係といったものを、人間とは全く無関係なもの、人間の働きから離れて客観的にそれ自体として存在するもの、であるかに錯覚する。彼らはあたかも「人間」という言葉を恐怖しつつあるかのようである。「人間的」にものを考えるのは「非マルク

ス的」だと考えているかのようである。だから彼らは「階級」を考える場合にも、それが一定の生産段階における一定の仕方での人間の集団であり組織であることを忘れ、階級というのは何か人間ばなれのした或るものであるかに錯覚する。すなわち彼らはマルクスのいう自然をも、生産力や生産関係をも、階級をも、すべて超越的な「物自体」に化してしまうのである。しかし、上来の種々さまざまな引用からしても明らかなように、マルクスほど「人間」にふかい関心を寄せた思想家はない。マルクスほど好んで「人間的」menschlich という言葉を用いた思想家はないのである。たしかに彼は、さきに（三一において）見られたように、労働の分割と私的所有制とにもとづく「人間の自己疎外」の結果として、もと人間のつくり出したもろもろの「関係」が人間に対立し、人間の意志と恣意から独立した他者的な力として人間を支配するにいたるという事実を強調した。しかしそのことは決して決定論的・宿命論的に転釈さるべきではないであろう。たしかに所与の生産関係は個としての人間の意志を高く超越したものではあるであろう。しかしそのことは、階級としての人間――そして階級というのはどこまでも人間の組織であることが忘られてはならない――、さらに、無階級的な将来の社会にあっては、全人類としての人間が、自由な行動的主体として、人間を窒息させるようなあらゆる古い「関係」を破砕し、真に人間を人間として生かすところの新しい関係を作りあげてゆくものだということを決して否定するものであってはならない。個はたしかに無力である。しかし階級あるいは人類は強力な歴史的形成力を有するものと考えねばならない。もし一つの階級としてのプロレタリアート――反復して語るならば、プロレタリアートというのは、プロレタリアの一組織であることが忘られてはならない*――が、能動的な主体として実践的に行動し、かくて新しい世界秩序をみずから作り出す能力をもたなかったとすれば、マルクスは初めからあれだけ思索の労をかさね、あれだけ多くの著述を作り出すことはしなかったであろう。けだし彼をしてあの殆んど超人的な精神的労働に堪えさせたのは、ひとえに彼がプロレタリアートの世界変革的な行動力に寄せた大き

い期待だったからである。しかしもしプロレタリアートがそうした創造的な力をもつとすれば、一つの階級としてのブルジョアジーもまたかつては封建貴族に抗して革命的な役割りを果たしたのであり、そして現在でもプロレタリアートに対して一つの主体的・能動的な力として対抗しつつあるのである。要言すれば、歴史を形成してゆくのはつねに階級的に組織された人間なのであって、人間以外の何ものでもないのである。だからわれわれはマルクスを語る場合、「人間」について語ることを決して恐怖すべきではないのである。なぜならマルクス自身、決してそれを恐怖しなかったからである。というのは、右に二カ所にわたってほぼ同じ言葉で反復されたかの衝動、すなわち「最も恥ずべき、最も不潔な、最も偏狭かつ最も意地わるい諸激情」というのはいったい何であるだろうか。それは流れる水、野に咲く花、空にさえずる鳥などに見られる激情なのであろうか。明らかに否である。それはまさに人間において、そしてただ人間においてのみ、見いだされるエゴイスト的な激情にほかならない。マルクスによれば、まさにこの激情が自由な、科学的な経済学に対して復讐の刃を向けるのである。またこの激情の嵐のうちにかの資本主義的蓄積は行われたのである。そして最後にこの激情がはじめて「生産力と生産関係との矛盾」を生ぜしめるのである。けだし、この矛盾の底にあるものは、自己にとって有利な現存の生産関係あるいは所有関係をどこまでも固守しようとする所有階級のエゴイスト的衝動、かくて、生産力の発展に相即する新しい生産関係の樹立をどこまでも阻止しようとする「人間の胸奥の最も激烈な、最も偏狭な、最も意地わるいもろもろの激情」にほかならないからである。こうした「人間的な、あまりに人間的な」激情の作用することなしに、いわば自然必然的に、生産力と生産関係とが矛盾に陥るなどと考えることは、一つのノンセンス以外の何ものでもないであろう。もっとも、「自然必然的」という言葉をわたしは一概に不可とするわけではない。しかし、マルクスの場合、自然はつねに人間の行動と相即する自然であり、したがって「自然必然的」というのは、やがて「歴史必然的」でもあったことが看過さるべきではないであろ

う。すなわち自由に即した必然、また必然に即した自由のみが、人間の経済史を、やがて政治史を織りなしてゆくのである。

＊ わたしはここではプロレタリアートをプロレタリアの一組織として捉えた。ところで、わたしはさきに（一〇において）、「たとえばブルジョアジーといいプロレタリアートというも、それらはそれ自身において一定の組織をもつものとは見られない」と語っておいた。この二つの見方は明らかに矛盾する。それは両者があまりに簡にすぎて十分に具体的でないことに由来する。厳密に語るならば、あらゆる階級は組織への胎動を孕み、そして極めて未組織的なものから次第に完全に組織的なものとして自己を結集してゆくのである。歴史におけるすべての階級はつねにそうした形成・発展の途上にあるのであり、したがってそこには完全に組織を欠く階級もなければ、また完全に組織を完成した階級もない。かく語らるべきであろう。要言すれば、流動的な歴史の世界では何ものも固定的・絶対的に捉えられてはならないのである。なお、マルクスの階級観については、のちに更に語られる機会があるかも知れない。

『資本論』のいたるところでマルクスはあらゆる時代の所有階級、しかしわけても近代における資本家階級のエゴイスムスについて語っている。中でも特に印象的なのは、いわゆる「資本の本源的蓄積」に関連して、彼が、「一五世紀末以来の被収奪者に対する血の立法 Blutgesetzgebung。労働賃金引き下げのための諸法律」について語っている個所である。そこではいろいろの具体的な実例があげられた上、つぎのように言われている。「かくて、暴力的に土地を収奪され、放逐され、浮浪人にされた農村民は、怪奇かつテロ手段的な法律 grotesk-terroristische Gesetze に鞭うたれ、烙印され、拷問されて、賃金労働の制度に必要な一つの訓練の中に押し込まれたのである」*。また、「興起しつつあるブルジョアジーは、労働賃金を『調節する』ため、すなわち不正利殖に好都合な枠内に無理に押し込むために、また労働日を延長し労働者自身を標準的な依存度のうちに維持するために、国家権力 die Staatsgewalt を必要としかつ利用する。そのことはいわゆる本源的蓄積の一つの本質的契機なのである」**。

＊ Das Kapital, Bd. I, op. cit., S. 776.

** ib., S. 777.

またマルクスが「産業資本家の発生」について叙している個所も、いわゆる「キリスト教的植民制度」を特徴づけたもろもろの野蛮行為をはじめ、種々の悽惨な搾取の実例に満たされている。しかしわけても印象的なのは、彼によって引用されたフィールデンの言葉である。いわく、「……子供を極度に酷使することがこれらの奴隷監督人の利益であった。というのは、彼らの給料は子供から搾り出されることのできた生産物の量に比例していたからである。残酷は当然の結果であった……多くの工場地帯、とくにランカシャでは、工場主に委託されたこれらの無邪気なそして友だちのない者たちに対して、悲痛きわまりなき苛責が加えられた。彼らは過激な労働によって死にいたるまで駆り立てられた……彼らはもっとも念入りに洗練された残酷さでもって鞭うたれ、鎖につながれ、責めさいなまれた。彼らは多くの場合骨の髄まで飢えていた、しかも鞭打ちは彼らを労働へと縛りつけるのであった……いな、ある場合には、彼らは自殺へと追いつめられた……ダービーシャ、ノッティンガムシャ、ランカシャの美しくロマンティックな谿谷は、世間の人目から隔絶されて、苛責――そしてしばしば殺人!の、悽惨な荒野となった……工場主の利潤は莫大であった。それはただ彼らの人狼的な渇望を研ぎすますだけであった……」。* マルクスはこうしたフィールデンの言葉を引用し、そしてなおその他の実例をあげ、そして最後につぎのような結語をあたえているのである。いわく、「資本主義的生産様式の『永遠の自然法則』を解き放ち、労働者と労働諸条件との分離過程を完成し、一方の極では社会的な生産手段および生活手段を資本に転化し、その反対極では多くの民衆を賃金労働者に、自由な『労働貧民』に、近代史のこの作品に、転化すること、それはかくも大なる労役であった Tantae molis erat。もしも貨幣が、オジェの言うように、『その片頬に自然的血痕をつけてこの世に生まれる』のだとすれば、資本は、頭から足の爪先まで、ありとあらゆる毛穴から、血と汚物とを滴らしつつ von Kopf bis Zeh, aus allen Poren, blut- und schmutz-

triefend 生まれるのである」**。

* ib., S. 798.——マルクスはフィールデンの言葉をつぎの書物から引用している。*John Fielden*: „The Curse of the Factory System", S. 5, 6.

** ib., S. 800—801.——オジェの言葉はつぎの書から引用されている。*Marie Augier*: „Du Crédit Public" (Paris 1842, S. 265.)

一般に所有階級の、しかしわけても近代的産業資本家階級の、あくことなき求心的・利己的自愛、これがマルクスの全経済史観を一貫する中核的思想であった。ところで右にも見られたように、所有階級は、そうした自己の自愛的衝動を最大限に満足させるために、つねに「国家権力を必要としかつ利用する」。すなわちマルクスによれば、歴史におけるその都度の国家権力はつねに必ずその時代の所有階級によって掌握され、そしてつねにこの階級の特殊利益の増進と擁護とのためにのみ利用されるのであり、その意味において、法と政治との底に潜むものは階級的エゴイスムスであると言われていいのである（三二を参照）。政治と経済とのそうした関係——すなわち政治は一めんにおいていわゆる「上部構造」としてそれの「基底」たる経済に依存的でありながら、同時にまた支配の武器として逆に経済の動きを限定する一つの強い力でもある（けだし、もしそうでなければ、所有階級は好んで政治権力を占有しようとはしないであろうから）という相関関係——を明確に物語っているのは、『資本論』のつぎの個所であるであろう。いわく、「不払い剰余労働がその形式において直接の生産者から汲みあげられる特殊な経済的形式が、支配・隷属関係 das Herrschafts- und Knechtschaftsverhältnis を限定する、すなわち、いかにこの関係が直接に生産そのものから発生し、また、それ自身の側で、生産に対して限定的 bestimmend に逆作用 zurückwirkt するかを限定する。経済的な、生産関係そのものからして発生するところの共同体、の全形成と、同時にまた、それの特殊な政治的形態

とは、まさにそうした限定にもとづくのである。全社会的構造の、したがってまた主権・従属関係という政治的形式の、要言すれば、その都度の特殊な国家形式の、最も内奥的な秘密 das innerste Geheimnis、それの隠された基底 dis verborgne Grundlage、をわれわれが見いだすのは、いつでも、生産諸条件の所有者の、直接生産者への直接な関係――それのその都度の形式は、つねに、当然、労働の仕方の一定の発展段階に、したがってまたその段階の社会的生産力に対応するところの一つの関係――においてである。もっともそのことは、同一の経済的基底――その主要諸条件から見て同一の――が、無数の種々ことなる経験的諸状態、自然の諸条件、もろもろの種族関係、外から作用する歴史的諸影響、等々によって、現象における無限の変容と段階――それらはただ経験的に与えられたこれら諸状態の分析によってのみ理解さるべきである――を示すことができる、ということを妨げるものではない*」。

* Das Kapital, Band III, Teil II, Volksausgabe, besorgt vom M.-E.-L.-Institut, Moskau 1934, S. 841—842.

支配・隷属の政治的関係は直接に生産から生ずると共に、逆にこの生産に対して限定的に作用する。だが、この相関関係そのものが、究極においては、生産諸条件の所有者の、直接生産者へのその都度の関係、すなわち、まさに経済的な基底によって限定される。――これが政治と経済との関係についてのマルクスの思想であったのである。* しかるに、上来見て来たように、経済の領域における推進力たるものは、強く求心的・利己的に傾斜した所有階級の階級的自愛であった。したがってわれわれは、右のマルクスの言葉を摸して、より簡単に、「政治的世界の最も内奥的な秘密、それの隠された基底、をわれわれが見いだすのは、つねに、所有階級のあくことなき求心的・利己的自愛――それは、その都度の社会的、歴史的条件に照応して、無限に多様な形態をとることができる――においてである」と語ることもできなくはないであろう。

* これとほぼ同じ思想はエンゲルスのスタルケンブルクへの書簡（一八九四年一月二五日付）にも見いだされる。M/E, Au-

sgewählte Schriften, op. cit., Bd. II, S. 474—5.

だが、所有階級におけるそうした求心的自愛の追求は、被支配者たる無所有階級の抵抗なしに永く平穏に続けられることをえない。けだしそれは、さきに（二二および二三において）素描された支配と服従との論理のとうてい許容しないところだからである。すなわちわたしのそこで語ったように、「人間のうちにはつねに、自由と平等へのやみがたい憧憬が潜んでいる。すなわち人間は、理由なしに暴政に屈するには、あまりにも自愛的であるのである……すなわち忍従の対極をなすものは革命である。忍従においてひとは、支配者の圧力に屈して、ただ『生きる』という最小限の自愛の満足を求めるのみであるに反し、革命においてひとは、支配者の圧力を反撥して、真に人間にとってふさわしい充実した生を、かくて自愛の十全な満足を求めようとする」（二三を参照）からである。マルクスがプロレタリアートに課した課題はまさにそれにほかならなかった。すなわちブルジョアジーのあくことなき求心的自愛からしてどこまでも自己の根源的自愛の可能性を死守すること、それがためには何よりもまず闘争の武器として国家権力をたたかいとること——けだし、「あらゆる階級闘争は一つの政治的闘争である」*から——、それがプロレタリアートに課せられた歴史的使命であったのである。

* Manifest, I, op. cit., S. 32.

かくてマルクスは、支配階級たる所有階級と、被支配階級たる無所有階級との相剋の場として、——前者における求心的・エゴイスト的自愛と、後者における根源的・生存権的自愛との相剋の場として政治的世界を捉えたのであった。たしかに、プロレタリアートが「古い生産関係と共に、階級対立の、一般に階級そのものの実存条件を止揚し、それと共に、階級としての自己自身の支配をも止揚」（二九を参照）した暁には、言葉の固有の意味での、すなわち、根柢において一階級による他階級の搾取に立脚すると考えられる「政治的世界」もまた止揚され、かくて「万人に根

源的自愛の満足を」というかの自然法の理念（二六を参照）が十全に実現されることとなるであろう。だが、それまでの間、すなわち「政治的世界」がいまだ存続する限りは――そしてこの存続の期間は、なおかなり長期にわたるものと予期されなければならない――、この世界はどこまでも支配階級の求心的自愛と被支配階級の根源的自愛との血みどろな相剋の場として、いわば「自愛の弁証法」の歴史的発展の舞台として捉えられるのでなければならない。――これが政治についてのマルクスの中核的思想、すくなくとも、わたしの理解しえたかぎりでのそれ、であったのであり、そしてそこに、わたしは、政治的世界の最も基本的な一つの相が鮮やかに浮き彫りされていることを看取せざるをえないのである。

三四　政治的世界の三圏的構造

わたしはさきに（一一において）「政治的世界」のもとに広狭二つのものを理解した。第一にわたしは、それのもとに、国家の名をもって地球上に共存するもろもろの集団を理解した。この意味において、たとえばイギリスは一つの政治的世界である。日本もまた一つの政治的世界である。それらはそれぞれ一つの特殊な政治的世界であり、そしてその中には、互いに利害を異にしたもろもろの階級が、そのうち一つは支配階級として、他は被支配階級として、つねに多少ともに相剋の契機を孕みつつ共存しているのである。わたしの従来主として問題としてきたのは、この意味での政治的世界にほかならなかった。

しかし個々の国家のみが政治的世界であるのではない。かえって、地球を舞台として展開される国家と国家、民族と民族との複雑多様な相関関係もまた一つの大きい政治的世界を形成するのである。さきのもろもろの特殊な世界に対して、これは、そうした特殊を内に含む一般的な政治的世界である。もしさきの特殊な世界が、それぞれ一つの自己

中心的な星にたとえられるなら、これは幾多の星の相関的に散在する多中心的な大空にたとえられていいであろう。それは、幾多の政治的世界を構成要素として成りたつ高次の政治的世界である。いわば世界の世界である。

そのようにしてわたしは政治的世界のもとに広狭二つのものを区別した。いわば広域的な政治的世界と狭域的なそれとである。前者は多くの主権的国家を横につらねたものとして横軸的な政治的世界と呼ばれてよい。それに反して、各国家がそれである狭域的な政治的世界は、そのうちに支配階級と被支配階級との上層・下層的構造を有するものとして、縦軸的な政治的世界とよばれていいであろう。

ところでわたしは、右の二つのほかに、さらにいま一つ別のもの、最も狭域的な政治的世界を追加すべき必要を感ずる。それは各々の国家の政治的上層そのものである。支配者とか政治家とか呼ばれる個々の個人がそのうちにおいて権力の争奪に狂奔しつつある世界である。わたしは右におのおのの国家を特殊な政治的世界と名づけ、そしてマルクスに従って、それを支配階級と被支配階級との相剋の場として捉えた。しかしこの支配階級というのは必ずしも美しく調和結合した一つの共同体であるわけではない。もっとも、被支配階級への対立・抗争に際しては、支配階級にぞくする個々の個人は、共同の利益という観点から一つに結合するであろう。しかしそのように、一方、共同の敵に対しては一致団結して抗争しつつある支配階級そのものの内部に、さらに、個々の党派あるいは派閥の、しかし究極においては個々の個人の、熾烈かつ執拗な権力争奪戦の存することは否定されることのできぬ事実である。そうした意味で、わたしは、おのおのの国家の支配者層そのものを、最も狭域的な政治的世界として取りあげようとするのである。

・かくてわたしは三重あるいは三層の政治的世界を考えるわけである。第一に国際的・広域的なそれであり、第二に国家的・狭域的なそれであり、そして第三に国内的・最狭域的なそれである。もっとも、それらはそれぞれ別個

に、たがいに無関係に並存する三つの世界であるのではない。かえってそれらは互いに経となり緯となって一つの具体的な政治的世界を構成するもの、その意味で、政治的世界というのは具体的にはもと一つであり、そして右にあげられた三つのものは、たんにこの一つの重層的世界を形成する三つの圏、あるいは互いに交叉する三つの政治的断面にすぎぬものと見られてよい。

さて、右の第一の広域圏に見られるもの、それは、それぞれ一つの中心として独立の主権を要求しつつ対立する諸国家の緊張的共存であり、そしてそれら国家の行動の底に潜むものは、いわば国家的自愛あるいは民族的自愛である。つぎに第二の狭域圏に見られるもの、それは支配・被支配の関係においてつねに多少ともに相剋的に共存するもろもろの階級であり、そしてこれら階級の行動の発条たるものは、上来明らかにされてきたように階級的自愛である。それに対して、各国家の政治的上層がそれである最狭圏に見られるものは、権力の座の争奪をめぐって不断に抗争しつつあるもろもろの個人であり、そして彼らの行動の最深の動機をなすものは権力意志的な個人的自愛なのである。

右の三つの圏において「政治」は種々ことなる形態をとるであろう。第一の広域圏における政治は軍備に裏づけられた外交である。けだし外交とは、他の国家への対立において自己の存立を主張し、自己の利益あるいは利権を擁護しようとする国家そのものの活動にほかならない。それに反して第二の狭域圏における政治は内政、警察その他の強制機関に裏づけられた内政である。けだし内政とは、一めんにおいて国家のうちに秩序を維持し、かくて公共の福祉を確保するという一般的目的——国家のレゾン・デートルはまさにそこにあるのである（二四を参照）——を有すると共に、同時にまた、あるいは生じうべき被支配階級の反抗に対して自己の安泰と利益とを守護しようとする支配階級の、あるいはその政治核としての政府の、活動にほかならない。最後に、第三の最狭域圏における政治はおそらく統

率と呼ばれていいであろう。けだし統率とは、国家ピラミッドの上層に立つ一人あるいは少数の首脳的個人が、自己に協力する同僚、あるいは自己に隷属する下僚――それらは一めん首脳者に服従しつつ、しかもつねに必ずしも彼に心からの忠誠を捧げているわけではなく、機会だにあらば、彼を押しのけてでも、国家権力のより大きい分け前を自己の手中に入れようと意図しつつある連中である――に対し、あるいは威嚇、または懐柔、あるいは妥協、といった種々の策謀をもって、これを自己の指導あるいは支配のもとに確保しようとする活動にほかならない。もつともそうした策謀は、外交、内政、等々のあらゆる政治活動にも附随するものであって、必ずしも政府部内の統率のみに局限されるわけではないが、しかしそれらが、ここにおいて特に頻繁に行使され、かつ特にその効果を発揮することは否定されえないところであろう。

そのようにかの三つの圏において政治の形態の異なると共に、その主体もまた必ずしも同じではない。けだし、外交の主体は国家であり、内政の主体は支配階級の政治核としての政府であり、そして政治的上層における統率の主体は、一般に支配者的地位に立つある特定の個人だからである。しかしこの区別は究極においては消滅する。というのは、究極において政治の主体はつねに右の第三のもの、すなわちある特定の個人、時としては一人の、他の場合には複数の、しかしいずれにしても極めて少数の個人だからである。もっとも、政治の世界はつねに集団的活動の世界であり、集団的背景を欠く個人は政治的に全く無力と言われなければならない。しかしそのことは、政治的に行動する集団そのものがつねにある特定の個人を中心として動くという事実を否定するものであってはならない。かくてたとえばソ連とアメリカとの外交的折衝の主体は、さしあたり、一方ソ連とよばれ、他方アメリカとよばれる二つの国家あるいは連邦である。だからたとえば新聞は、「ソ連」が核実験の停止を一方的に声明したとか、「アメリカ」がそれに対してこれこれの反応を示したとかいう風に報道するのである。すなわちここでの主体は明らかに二つの国家その

ものである。しかし国家はその場合たんに名目的主体であるにすぎない。というのは、国家そのものの対外的態度を決定し、これを国家の名において内外に公表する実質的主体は、明らかに両国家の政府だからである。だからたとえば新聞は、「ソ連」という代りに「モスクワ」といい、「アメリカ」という代りに「ワシントン」といい、さらにそれをより小さく絞って、一方を「クレムリン」、他方を「ホワイトハウス」といった風にも表現するのである。ところで、クレムリンといいホワイトハウスというも、それは決して一定の建築物を指すのではない。かえってこの建築物の中にあってあるいは外交の、あるいは内政の衝にあたりつつある政府機関を指しているのである。ところで、あらゆる政府機関はつねに復数の人間から成るのであるが、それらの人間のなかには、その都度、政府の態度決定にあたって最も比重のおもい少数の人間、究極においては一人の人間があるはずである。もとより一国の政治が一人の人間の恣意でもって行われうるというのではない。極端な独裁政治は別として、通常の場合、一国の政治はどこまでも一定の組織によってなされることは自明である。しかしこの組織は大抵は一人の個人を中心として形成されているのが常であり、そしてその個人の発言力は他の者のそれ以上に強力であるのが普通である。そうした個人をさしてわれわれは彼を政府の「首脳」とよぶ。もっとも、首脳という言葉はしばしば複数的な含蓄をもって使用される。政府の上層に立つ幾人あるいは幾十人をさしてこれを「政府首脳」と呼ぶわけである。だが、その場合にも「首脳中の首脳」が一人あるはずである。たとえば写真を撮影する場合、必ず中心的位置に立つ一人である。クレムリンについて言えば、かつてのスターリンがそれであり、現在のフルシチョフがそれである。ホワイトハウスについて言えば、かつてのルーズヴェルト、トルーマンがそれであり、現在のアイゼンハワーがそれである。もちろん、国柄によって、そうした最高首脳者の独裁的性格にも大きい相違があるであろう。組織あるいは制度の力が極めて大であって、個人の決定力がさして強力でない国家も少くはないであろう。しかし、あらゆる重要な問題について「最後の決断」を下すも

のが、どこでもつねに、一定の地位に立つある特定の個人であるかぎり、程度の多少はあれ、彼らの政治的行動には「独裁」の契機がみとめられねばならない。もっとも、中にはたんに組織のロボットにすぎぬ名目的首脳もないではないであろう。だがその場合にも、組織のかくれた深みにあって組織そのものを指導し、そしてこの組織の決定をそのロボットの「名」を通じて遂行してゆく実質的首脳があるはずである。すなわちあらゆる政治的組織は、公然であれ隠然であれ、ともかくつねにある特定の個人を中心として政治的に行動する。したがってわたしが右に、国家はたんに名目的主体であるにすぎず、実質的な主体はつねに政府であると語った言葉は、さらに一歩をすすめて、政府もまたたんに一つの名目的主体であるにすぎず、真の実質的主体はつねに究極において政府の中心あるいは主軸に立つ特定の個人であると言い直されなければならない。

しかし、右に言われたように、政治の世界は集団的行動の世界であり、したがって右の特定の個人というのも決して単なる個人として政治的に行動するのではない。なぜならさきに（一一において）ジューヴネルの語ったように、「一つの企画が、他のもろもろの意志の好意的態度を不可欠のものとして含むやいなや、そして、ひとがこれらの意志を集合しようと努力するかぎりにおいて、そこに『政治』がある」のであり、かくて政治的技術というのは、帰するところ、「諸意志の結合による人間的諸力の加算のテクニックにほかならない」からである。この加算のテクニックに未熟な政治家は政治の世界から転落する。だから右に言われた個人、すなわち政府の最高首脳者は、彼が政府の諸要員の意志を自己の側に確保することをうるかぎりにおいて、初めてその政府の首脳者であることができ、かくてその政府の「名」において行動することができるのである。一つの内閣の首班は、内閣構成員の積極的援助をかちうるかぎりにおいて、初めてその内閣の名において外交し内政することができるのである。その意味においてあらゆる政治的主体はつねに一定の組織を実体としてこれと相即融合の関係に立つものと言われねばならないであろう。フルシ

チョフという一個の個人は、現在のソ連政府という一つの組織――そして組織はつねに複数の人間から成るものであることが忘られてはならない――を実体とし、それと緊密に相即することによって、初めて十分の実力をもったソ連首相であることができるのである。すなわちその都度の政治的主体はある一定の政治的実体――いまの場合は政府――と相即して初めて政治的に行動することができるのであり、逆にその都度の政治的集団はある一定の政治的主体を中心あるいは核とすることによって初めて政治的世界にその地位を占めることができるのである。――この関係はさらにつぎのように拡大されることもできるであろう。いわく、たとえば在野の政治家は一定の政党を自己の実体としてもつことによって初めて充実した意味での政治的主体たることができる。また一つの目的を政治的に実現しようとする一人あるいは少数の個人は、いわゆる意志の結合による諸力加算のテクニックによって、たとえば一つのプレッシャー・グループを作りあげ、それを自己の実体とすることによって初めて政治的に有力な一個の行動主体たることができるのであると。しかしわたしはいまの場合、問題をそこまで拡げることをえない。それゆえここではたんに政府の首脳と政府機関との主体・実体・関係のみをいわば一つの典型として取りあげているのである。*

* 右に「実体」と呼ばれたものは、むしろ「基体」と呼ばれた方がいいかも知れない。拙稿、「社会における主体と基体との相関について」、同志社法学、一三号、四一頁以降参照。

ところで、首脳的個人と政府とについて言われたことは、さらに移して政府と国家とについても言われることができる。というのは、外交あるいは内政において一つの政府が政治的主体として行動する場合、それはただ国家――そして国家というのは、極めて多数の人間から成るところの一つの組織にほかならない――を自己の実体とし、この実体と相即融合することによってのみ、真に強力な政治的主体として発言し行動することができるのである。というのは、国民大衆の支持をかちえざる政府は、一時はいかに強力であっても到底永続的ではありえず、早晩瓦壊せざるを

えないであろうからである。

外交の主体は国家、内政の主体は政府、そして政府部内における統率の主体は個人、――わたしはさきにこうした区別を試みると共に、この区別は究極において消滅するものと考えた。けだし政治の究極の主体は、政府の実権を掌握する一人あるいは少数の首脳にほかならないからである。しかし、政府の首脳としての主体は政府機関という実体と十分に相即せずしては真に実力ある主体たることを得ず、さらに政府そのものは国民大衆をふくむ国家を実体とすることなしには真に能動的な主体たることをえないという右の論理は、個人と政府と国家との複雑な相関関係にまで再びわれわれを引き戻したのであった。いまその関係を明らかにするために、複雑な国際関係の焦点に立つ一人の近代的独裁者、たとえば在りし日のヒットラーを考えてみたいとおもう。すればわれわれは、右にいわれた三つの圏、政治的世界がそれから成るといわれた三つの圏あるいは断面が、彼を一つの中心として複雑にからみ合っていることを想見せざるをえないであろう。彼はドイツ政府の最高首脳者として、外、他の諸国家との外交――そして外交にはつねに軍備あるいは軍事が随伴する――を一手に処理すると共に、内、ナチス・ドイツの内政――そして内政にはつねに警察その他の強制力が随伴する――を一手に掌握したのであった。その際、外交面において彼の全関心を占めたのはおそらく国家としてのドイツそのものの勢威であり、利益であり、領土の拡大であり、等々であったであろう。すなわち彼はドイツの国家的自愛をその一身に具現し、そして他の諸国家の犠牲において、この自愛の可能なるかぎり大きい満足を追求しようとしたのである。そうした自愛が必然的に求心的・エゴイスト的に傾斜せざるをえないことはじつは当然の成り行きであったであろう。それに反し、内政面において彼の意図の中心を占めたのは、おそらく被支配階級の犠牲の上に立脚する支配階級そのものの利益と繁栄とであり、かくて求心的・エゴイスト的な階級的自愛の満足であったであろう。なぜなら、彼がたとえいかに独裁的な独裁者であったとしても、しかも彼は、彼を囲

繞する政府の要員たち、またこの政府にまで結晶した当時のドイツ支配階級、の階級的自愛をある程度満足させ、かくて彼らの強い支持をかちうることなしには、和戦両様のあの大がかりな外交と内政とを、たとえ短時日にもせよ、完遂することはできなかったであろうからである。ところで彼は、そうした外交と内政とを遂行するために、彼に帰属する政府の、党の、軍の、警察の、あらゆる成員を、わけても彼の側近たる首脳たちを、鉄の規律のもとに統率する必要があった。それは右にいわれた最狭政治圏における政治活動にほかならない。この活動において最深の動機をなしたもの、それは、国家の最高首脳者としての自己の地位を確乎不動たらしめることによって、利己的・主我的・権力意志的な（一三を参照）自己の求心的自愛の満足を永く確保しようとする個人的要望であったであろう。

そのように、ドイツ国家の最高首脳者としてのヒットラーを中心として、右にいわれた三つの政治圏は一つに結びついたのであった。彼は全地球的な規模における国際的・広域的な政治圏の一つの中心であり、同時にまた、ドイツ国家がそれである国家的・狭域的な政治圏と、ドイツ政府――党、軍、等々の首脳をも含めての――がそれであるところの国内的・最狭域的な政治圏との唯一の中心でもあったのである。かくてかの三つの形態での政治、すなわち対外的な外交と、対内的な内政と、そして政府部内での統率とは、彼を最高の主体として、彼を「最終の決断者」として遂行され、したがって彼において一応渾然たる統一を有していたのである。要言すれば、三つの政治的主体、すなわち国家、政府、個人が、彼において一つに結合していたのである。

そしてそれこそがまさに現代の「政治」の実相にほかならない。幾つかの国家がほとんど孤立して存在し、相互に大した交渉をもたずにすごしえたであろう黄金時代は別として、全地球が一つの世界となった現代にあっては、他の諸国家への複雑な利害関係をもたないで平穏に存在しうるような幸福な国家は存しえない。また被支配階級が未組織的に分散し、かくて無力であり、その結果いかに苛酷な専制的支配にも黙々と忍従したであろう古き時代は別とし

て、彼らにおける階級組織とそれに伴う階級意識とが次第に強化されて来た現代にあっては、被支配階級の反抗の可能性を全然無視しうるような幸福な政府は存しえない。さらにまた、国家支配者がいわゆる神授的な権力あるいは権威を主張し、そしてそれを信ずるだけ十分に単純質朴な属僚を自己の周囲に見いだしたであろう過去の時代は別として、自己の同僚あるいは下僚のうちに可能なる自己の政敵、機会だにあらば自己を押しのけ、自己に取って代ろうとの野望を潜めつつある政敵をかぎつけ、かくて彼らを懐柔することにつねに心を労することなく、安泰にその絶対的地位を享受しうるような幸福な政治的首脳は存しえない。したがって現代の政治は、程度の多少こそあれ、一面において戦争の危機を孕んだ外交であり、他めんにおいて革命の危機を秘めた内政であり、そして第三面においてクー・デタあるいはより穏和な形での政争の危機を蔵した統率であり、そしてこの三つが三にして一という三一的構造においてあるものと言われなければならない。かくて統率の成功は内政のそれに依存し、内政の成功は外交のそれに依存する。外交に失敗した国家は必然的に内政面において大きい混乱を惹起せざるをえず、内政に挫折した政府は必然的にそれの内部に諸要員の不穏な磨擦を結果せざるをえない。逆にまた、外交の成功は内政のそれに依存し、そして内政の成功は、等々、かの三一的構造はいわば水も漏らさぬ緊密性を有するものと見られなければならない。

わたしが右に政治的世界の三圏的構造について語ったことは、あくまで一つの抽象的な図式としてのみ理解されるのでなければならない。無限に複雑多様な現実の政治的世界の、たんに一つの骨格だけを示したものと見られなければならない。厳密に語るならば、現実の政治的世界は三圏的であるよりもむしろ多圏的であるであろう。なぜなら、たとえば外交の面において、指導的国家とその衛星国家との関係、また内政の面において、支配階級と被支配階級との限界が必ずしも明確でなく、その間に帰趨の定かならぬもろもろの中間層の介在するといった場合、また統率の面において、政権の座にある政党の首脳と野に在って政権をねらいつつある政党の首脳との関係、等々は、わたしの右

に語った簡単な三圏的図式の範囲をはみ出るものと言わねばならない。だが、無限に複雑な現実に踏みこんで迷路に迷いこまないためには、われわれは、たとえ抽象的かつ不完全なものではあっても、ともかく一枚の地図を、大体の考察方向を指示する一枚の略図を用意する必要があるであろう。わたしの以上ところみた素描は、たんにそうした方法論的意図からのみものされたものと考えられねばならない。

（未完）